Museum of Yokohama Urban History
ハマ発
NEWSLETTER
ハマ発ニュースレター
横浜都市発展記念館館報◉第38号

[特集] 祝! 20 周年!

クロニクル 2018～2022

展示・イベントでふり返る5年間

HAMA・HATSU NEWSLETTER MARCH 2023
38
2023年3月

ご自由にお持ちください

[展示余話]

「横浜鉄道クロニクル」『鉄道旅行案内』と吉田初三郎

[資料紹介]

吉村鉄之助の関東大震災
—丹阿弥岩吉画「大正十二年九月一日正午時 大震火災之図」について—

横浜都市発展記念館

ハマ発 NEWSLETTER 第38号 2023(令和5)年3月15日発行(年2回発行・不定期)
編集/横浜都市発展記念館 発行/公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団 〒231-0021 横浜市中区日本大通12 TEL.045(663)2424 FAX.045(663)2453
題字ロゴ/高橋健介 印刷・製本/株式会社エイコープリント
本誌からの無断転載を禁止します。

EXHIBITION 特別展のご案内

豊国橋付近港町河岸の被災状況
1923(大正12)年9月2日午前
岡本三郎撮影 横浜開港資料館所蔵

横浜都市発展記念館・横浜開港資料館合同特別展
関東大震災100年

大災害を生き抜いて
—横浜市民の震災体験—(仮)

1923(大正12)年9月1日午前11時58分、神奈川県を震源とするマグニチュード7.9の地震が発生、南関東一帯は激しい揺れに襲われました。その直後、横浜では大火災が発生し、市街地は僅か一日で焼け野原となります。そうしたなかを生き抜いた横浜市民は、自らの体験を日記や回想記、写真等に残していきました。本展示では、横浜の関東大震災を残された個人の記録を中心に再現していきます。

【会期】2023(令和5)年8月26日(土)～12月3日(日)

会場 横浜開港資料館企画展示室

寄贈資料の紹介

令和4年8月以降に受贈した資料です。(敬称略)

寄贈資料名	点数	寄贈者
『横浜都市計画の変遷・計画図編』	1	内海宏
『市民の生活図集1970』	1	〃
『港北地区カルテ1981』	1	〃
『保土ケ谷区環境カルテ1983』	1	〃
SL機関車出発式の写真(1980年)	1	須藤一人
『海軍航空図 第1号』	1	平岩正宏
『海軍航空図 第102号』	1	〃

MUSEUM SHOP ミュージアム・ショップより

刊行物

『横浜鉄道クロニクル 発祥の地の150年』❶
横浜都市発展記念館／編 定価1,540円

『激震、鉄道を襲う！ー関東大震災と横浜の交通網』❷
横浜都市発展記念館／編 定価1,320円

『スポーツの祭典と横浜』❸
横浜都市発展記念館／編 定価980円

❸ ❷ ❶

オンラインショップをご利用ください！

当館の各種刊行物・オリジナルグッズ等については、オンラインショップでお求めいただけます。
QR コードを読み取ると、オンラインショップへジャンプします。

休館のおしらせ

横浜都市発展記念館・横浜ユーラシア文化館は、全館空調機更新工事のため、下記の期間休館いたします。なにとぞご了承のほどお願いいたします。

2023(令和5)年5月29日(月)
～2024(令和6)年夏頃(予定)

◉表紙図版
上空からみた
横浜都市発展記念館
2022(令和4)年

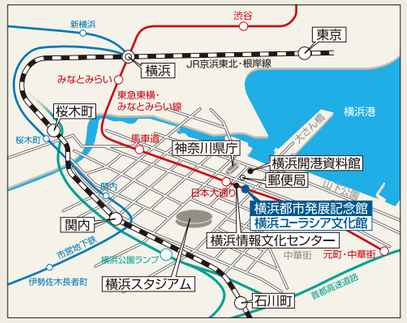
横浜都市発展記念館 利用案内

■開館時間
午前9時30分～午後5時(券売は閉館30分前まで)
※新型コロナウイルス感染拡大防止のため、開館時間等を変更する場合があります。

■休館日 毎週月曜日・年末年始ほか
(月曜日が祝日の場合は開館、翌平日に休館します。)

■観覧料
上記特別展開催期間 観覧料は別途定めます。
それ以外の期間 常設展のみ
一般200円／小・中学生、および市内在住65歳以上の方100円
※毎週土曜日は小・中・高校生無料
※「障害者手帳」「愛の手帳(療育手帳)」などをお持ちの方は、無料です。

■ホームページ
http://www.tohatsu.city.yokohama.jp/



交通アクセス

● 東急東横・みなとみらい線日本大通り駅(3番出口)0分
● 横浜市営地下鉄ブルーライン関内駅(1番出口)から徒歩約10分
● JR京浜東北・根岸線関内駅(南口)から徒歩約10分
● 横浜市営バス・神奈中バス「日本大通り駅県庁前」下車徒歩1分

※本誌は当館ホームページでもご覧いただけます。

編集後記
「ハマ発ニュースレター」第38号をお読みいただきありがとうございます。2023(令和5)年3月、横浜都市発展記念館は開館20周年を迎えました。これを記念して、本号の特集ではこの5年間を展示・イベントで振り返りましたが、いかがでしたでしょうか。さて、空調設備工事のため、当館は2023年5月29日(月)から2024(令和6)年夏頃までの予定で休館いたしますが、休館中も様々な事業を計画しております。情報は随時当館ホームページ、ツイッターでお知らせいたします。(松)

◎次号発行予定 2023年9月頃

クロニクル2018〜2022 展示・イベントでふり返る5年間

祝!20周年!

CHRONICLE 2018〜2022

横浜都市発展記念館が2003（平成15）年3月15日にオープンしてから、今年で開館20周年を迎えます。本誌19号（2013年3月）掲載の「クロニクル2008〜2012」、31号（2018年10月）掲載の「クロニクル2013〜2017」にならって、本号では、開館15周年以降の5年間のあゆみを振りかえります。（青木　祐介）

2018. 4/14(土)〜7/1(日)

企画展

「伸びる鉄道、広がる道路 横浜をめぐる交通網」

2018（平成30）年度最初の企画展は、横浜にとって港とならぶ重要な交通インフラである鉄道と道路を切り口として、陸上交通のネットワークから横浜の都市形成をひも解く企画展「伸びる鉄道、広がる道路」でした。またこの年は、京浜急行電鉄の創立120周年、そして首都高速横羽線の開通50周年の年でもありました。これらの記念展示として、常設展示室ではミニ展示「京浜電気鉄道と湘南電気鉄道」を、1階ギャラリーでは開通当時の高速道路の写真パネル展を開催しました。土日祝日におこなう子ども向けワークショップでは、館蔵資料「京浜急行沿線名所めぐりスゴロク」を大きく引き伸ばして、ジャンボ双六を楽しんでいただきました。

ジャンボ双六で京急沿線めぐり！

ミニ展示「京浜電気鉄道と湘南電気鉄道」

熱気に包まれた展示解説

2018. 10/6(土)〜12/24(日)

開館15周年記念企画展

「奥村泰宏・常盤とよ子写真展 戦後横浜に生きる」

開館15周年記念として開催した秋の企画展では、この年当館に寄贈された写真家奥村泰宏氏と常盤とよ子氏の2人が撮影した写真をもとに、戦後横浜に生きた人びとの姿、そして戦後の混乱期に生じた様々な社会問題について取り上げました。なかでも赤線地帯の女性たちの姿を追い続けた常盤とよ子氏の写真は、その社会性の強いテーマからメディアからも大きな関心が寄せられ、多くの方に展覧会場へ足を運んでいただくきっかけとなりました。開催期間中に常盤氏も会場を訪ねてくださいましたが、本展が開催された1年後の2019（令和元）年12月に逝去されました。当館では感謝と追悼の意を込めて、あらためて翌年9月に「常盤とよ子追悼展」を開催しました。

展示を見学される常盤とよ子氏

寄贈されたカメラとフィルム

赤線地帯を撮影する常盤とよ子氏
（奥村泰宏氏撮影、1957年）

2019. 7/13(土)〜9/23(月祝)

企画展

「一枚の切符から昭和のあの頃へ 思い出す横浜のイベント、ニッポンの風景」

記念きっぷでたどる横浜戦後史

サイコロ振って日本一周の旅

硬券をはさみでパチン！

2019（令和元）年度は夏の企画展開催となりました。夏休みにふさわしい企画として、当館が収集してきた鉄道の切符や記念きっぷ約300点をもとに、昭和の横浜そして日本各地の観光名所を旅するコンセプトの「一枚の切符から昭和のあの頃へ」を開催しました。1978（昭和53）年に当時の国鉄（現・JR）が始めた「いい日旅立ち」キャンペーンを、懐かしく思い出された方も多かったのではないでしょうか。展示タイトルの「一枚の切符から」に隠された意味がお分かりになりましたか？恒例となりつつあるワークショップのジャンボ双六では、切符好きにはたまらない硬券の周遊きっぷを6種類ご用意して、横浜発着の日本一周の旅を楽しんでいただきました。

2020. 1/18(土)〜4/12(日).7/23(木祝)〜9/22(火祝)

横浜市新市庁舎完成記念　3館連携展示

「近代横浜を掘る 洲干島からひろがる都市のすがた」

3館連携展示共通ポスター

敷地から出土した遺物の数々

オンライン展示解説

2020（令和2）年1月は、神奈川県内で新型コロナウイルスの日本最初の感染例が確認され、翌2月にはクルーズ客船「ダイヤモンド・プリンセス」乗船客の感染が確認されるなど、目に見えない感染の不安に社会が大きく揺れていました。やがて会期半ばの2月末で施設は休館となり、休館は3ヵ月に及びました。一度は展示を撤収しましたが、6月2日の再開館後、アンコール展示というかたちで、もう一度企画展「近代横浜を掘る」を開催しました。このとき公式ツイッターと公式ユーチューブチャンネルを開設し、展示の見どころをツイートやオンライン展示解説として発信していきました。コロナ禍は、当館にとって立ち遅れていたSNSやオンラインコンテンツに取り組むきっかけとなりました。

2021. 1/16(土)~3/28(日)

企画展

「後世に残したい都市横浜の宝 館蔵コレクション展」

2020（令和2）年6月2日に再開館したものの、コロナ禍でその後の企画展は予定していた内容を変更せざるを得ませんでした。そこで冬の企画展は、あらためて館蔵資料に向き合い、これまで資料をご寄贈いただいた皆さまへの報告の意味をこめた館蔵コレクション展として開催しました。そして前回から始めたオンライン展示解説に加えて、戦後の横浜市政ニュース映像「神奈川ニュース」のウェブ公開をスタートしました。鉄道に関する映像は人気が高く、昭和30年代の国鉄根岸線の着工工事や市電根岸線の映像は、現在も視聴回数の上位を占めています。まだ以前のような来館者でにぎわう状況にはありませんでしたが、少しずつイベントの再開も検討し、3月にはガイドイヤホンを使用しての小規模な歴史散歩を実施しました。

展示資料の8割が寄贈資料！

「神奈川ニュース」の公開

歴史散歩「日本大通りをゆく！」

2021. 7/17(土)~9/26(日)

企画展

「スポーツの祭典と横浜」

本来は東京2020オリンピック・パラリンピック大会にあわせて開催する予定でしたが、オリンピックが1年延期されたことで、本展も2021（令和3）年の開催となりました。本展では、明治から昭和期に至る横浜の市民スポーツの広がりを、地域に残る資料から紹介しました。特に、1964（昭和39）年開催の第18回オリンピック東京大会のコーナーには力をいれ、競技会場となった横浜文化体育館や、三ツ沢球技場関連の未公開資料を発掘・展示できたことは成果の一つといえます。この他にも、同大会を支えた横浜市民の資料や、横浜ゆかりのメダリストの資料を多数展示しました。

この年の夏は新型コロナウイルス感染拡大のため、東京2020大会直前に4回目の緊急事態宣言が発令され、市内会場での競技も無観客試合となるなど、大変厳しい状況での展示開催でした。しかし、大会閉幕後には、本大会における横浜関係資料を当館で受け入れることとなり、コロナ禍でのオリンピック開催という現代史資料の収集につながりました。

第18回オリンピック東京大会（1964年）の制服

体操女子五輪メダリスト池田敬子氏と夫の睦彦氏のご来館

オンライン展示解説

2022. 3/12(土)~7/3(日)

鉄道開業150周年記念企画展

「激震、鉄道を襲う！ 関東大震災と横浜の交通網」

2022（令和4）年は、日本で初めて鉄道が開通した1872（明治5）年から150年。鉄道開業150周年記念展示の第1弾として開催した企画展「激震、鉄道を襲う！」では、関東大震災で大きな打撃を受けた横浜の交通網が、壊滅的な被害から復興していくまでの状況を、当時の鉄道技師が撮影した貴重な工事写真帖等の資料をもとにたどりました。2020（令和2）年以降、コロナ禍で厳しい入館者状況が続いていましたが、春先から関内エリアの賑わいも戻りつつあり、多くの方に本展示をご覧いただくことができました。また本展示から、展示室内での対面の展示解説を再開したほか、ツイッター上で展示解説「横浜名所案内図絵」を全25回にわたって発信しました。

展示の基礎となった写真帖

展示解説の再開

マリンFM「横濱 歴史のタイムマシーン」での展示案内

2022. 8/6(土)~11/6(日)

鉄道開業150周年記念特別展

「横浜鉄道クロニクル 発祥の地の150年」

鉄道開業150周年記念展示の要となる特別展として開催した本展示は、鉄道開業から現在までのあゆみを50年スパンで区切ってふり返るもので、鉄道と都市形成というテーマをずっと追い続けてきた当館の強みが発揮された展示となりました。鉄道ファンにとっては、当館入口の湘南電車カラーを見ただけで、思わず身体が反応して中に入ってしまったのではないでしょうか。10月14日の「鉄道の日」は無料開館日としましたが、当日の展示解説には60人もの方が参加され、展示室はまさに満員電車状態。展示担当者もお立ち台に乗っての、気持ちの入った解説でした。またショップでは、開業当時の切符をイメージしたオリジナルキーホルダー「革ノ切符」が大好評。そのほか常設展示室では、鉄道開業150周年記念事業委員会の協力を得て、横浜市域に残る鉄道遺産を紹介するミニ展示「横浜の鉄道歴史遺産」を開催しました。

湘南電車カラーに彩られた正面入口

「鉄道の日」の展示解説

ミニ展示「横浜の鉄道歴史遺産」

❶『鉄道旅行案内』 1921(大正10)年　鉄道省編纂・博文館発行　当館所蔵
表紙(表・背・裏)

てんじよわ
展示余話

「横浜鉄道クロニクル」『鉄道旅行案内』と吉田初三郎

当館では昨年、日本で最初の鉄道が横浜に開業してから150周年を迎えるのを記念し、特別展「横浜鉄道クロニクル～発祥の地の150年」（2022年8月6日～11月6日）を開催しました。1世紀半の歴史をおよそ半世紀ごとに分け、三部構成の展示をご覧いただきました。

最初の半世紀には、京浜間の鉄道開通の後、国土の幹線である東海道との関わりに翻弄（ほんろう）されながら、貿易港横浜を支える近代的な陸の交通機関が建設されました。次の半世紀には、震災や戦災、高度成長によって再編を重ねながら、横浜駅を中心に都市・郊外の高速電車が発達し、また工業地帯の輸送を担う貨物の鉄道網が形成されました。そして、この半世紀は、ベッドタウンとしての横浜の鉄道網が、首都圏の巨大な交通網の一角に組み込まれていく時代でした。

ところで、今からおよそ100年前、最初の半世紀が過ぎた頃、鉄道開業から50年目（50周年の前年）を迎える1921（大正10）年に祝典や出版など、それを記念したいくつかの事業が鉄道省によって実施されました。鉄道省は国有鉄道の運営や国内の陸上交通の監督を担う国の機関で、1920（大正9）年に鉄道院を格上げして発足しました。

本展では「鉄道開業50周年」と題するコラムのコーナーを設けて、その中で『鉄道旅行案内』という出版物を展示しました。本稿ではこの『鉄道旅行案内』について紹介をしたいと思います。

『鉄道旅行案内』は1921（大正10）年、色刷りの沿線案内図を盛り込み、鉄道省の編纂により発行されました。「東海道本線」「山陽本線」「中央本線」…の順に、全国の国有鉄道の路線ごとで章が構成され、各章に解説文（本文）のページと、沿線の案内図（挿図）のページとが交互に配列されています。

案内図は鳥瞰図の形式をとり、駅名と地名、周辺の観光地などが示されています。なお、鳥瞰図とは、対象地域を鳥の視点から俯瞰し描いたイラストマップのことで、地図の一種とされます。

この挿図の作成を、表紙のデザインとともに鉄道省から委嘱されたのが、吉田初三郎という鳥瞰図絵師でした。初三郎は自らを「大正の広重」と称し、全国の鉄道会社や観光団体、地方自治体などから依頼を受け、鉄道の沿線や観光地、都市などを鳥瞰図に描きました。1930年代に最盛期を迎え、生涯に残した作品の数は数千点といわれています。

もとは洋画家を目指していましたが、師匠の勧めで商業画家に転じ、1913（大正2）年、関西の京阪電気鉄道の依頼で、初めて沿線案内図（鳥瞰図）を作成しました。これが当時の皇太子（後の昭和天皇）の目にとまり、絶賛を受けます。

そして、『鉄道旅行案内』の挿図と表紙を担当したことが、さらなる活躍のきっかけとなり、その地位を確立していきました。

さて、鉄道省編纂の『鉄道旅行案内』は好評を博し、数十回にわたり増刷されました。ただし、初版には初三郎の名は記されていませんでした。挿図と表紙の担当として、「吉田初三郎」の名が初めて明記されたのは、1924（大正13）年に発行された新版（第二版）です。

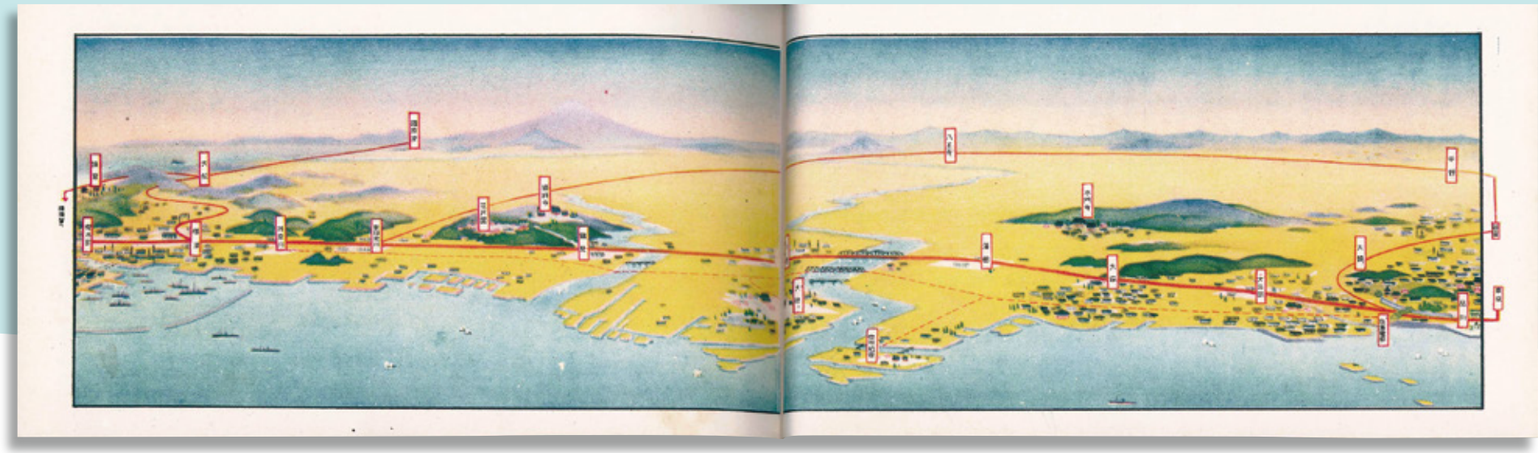
鳥瞰図は、後年の最盛期のような極端なゆがみや誇張はまだ少なく、忠実に景観を描写していると言えます。初版では、図中に配置されている文字はほぼ駅名だけで、盛り込まれている地理情報は圧倒的に少なかったのですが（❶挿図）、新版では、駅名だけでなく、観光地などの地名が大幅に加えられ、駅名と地名の区別が施されるなどし、初版にはなかった進化をうかがうことができます（❷挿図）。

もっとも『鉄道旅行案内』は、前身の鉄道院によって1914（大正3）年より、編纂・発行がされていました。ただし、当時は国鉄全線の沿線の名勝を文章で紹介するだけでした。また、その後の1930（昭和5）年にも、鉄道省の編纂で改めて『鉄道旅行案内』が発行されますが、そこには鳥瞰図の掲載はなく、平面図式の路線図に置き換えられています。

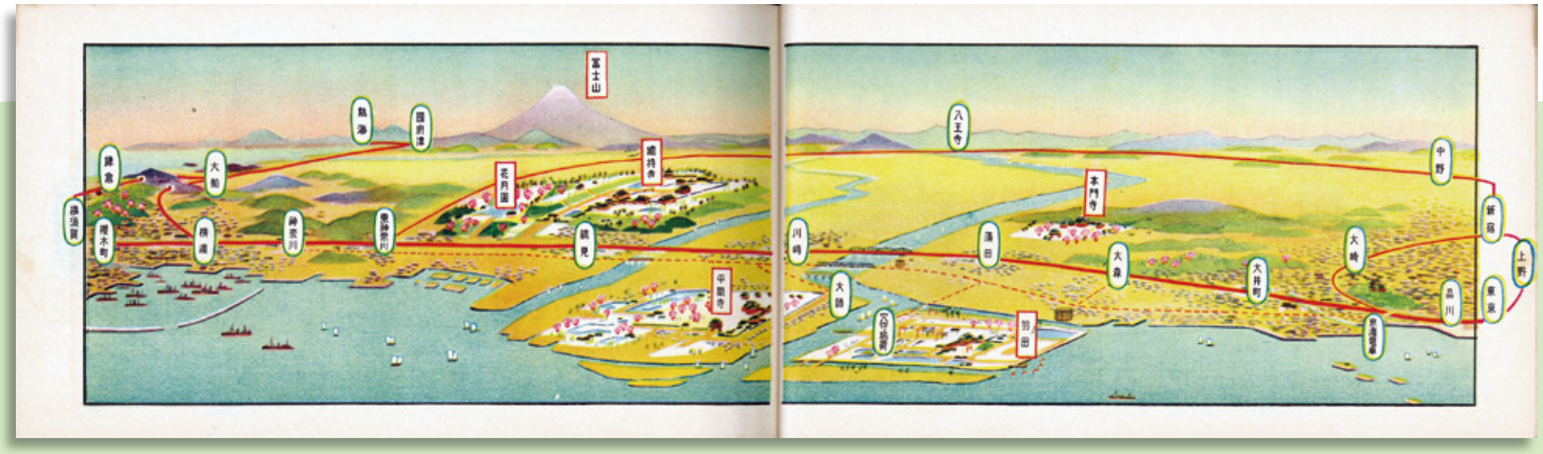
吉田初三郎が『鉄道旅行案内』の発行に関わったのは、大正後期の二つの版だけということになります。

（岡田　直）

挿図(東海道本線の東京～横浜間のページ)



挿図(東海道本線の東京～横浜間のページ)



❷『鉄道旅行案内』 1924(大正13)年　鉄道省編纂・博文館発行　当館所蔵
表紙(表・背・裏)

吉村鉄之助の関東大震災

―丹阿弥岩吉画「大正十二年九月一日正午時大震火災之図」について―

二〇二一（令和四）年三月一二日から七月三日まで開催した企画展「激震、鉄道を襲う！―関東大震災と横浜の交通網―」では、横浜都市発展記念館が所蔵する丹阿弥岩吉画「大正十二年九月一日正午時大震火災之図」（以下、「大震火災之図」）を初めて出陳した。❶のように、この資料は実業家であり、かつ衆議院議員でもあった吉村鉄之助が日本画家の丹阿弥岩吉に描かせたもので、観音菩薩の加護の下、大火災から逃れる吉村夫妻の様子を表現している。解説文に「大正丙寅春吉村大人の嘱に依り丹阿弥画之」とあることから、「丙寅（ひのえとら）」の年、すなわち一九二六（大正一五）年の春に描かれたとわかる。絵は軸装されており、タイトルに加え、「吉村所蔵」と記された木箱に収められている。当館は二〇一五（平成二七）年に吉村のご子孫から資料の寄贈を受け、企画展にあわせて調査研究を進めてきた。本稿では、「大震火災之図」で描かれた内容を紐解くとともに、そこから読み取れる吉村の震災体験について考察を加えていきたい。

❶ 丹阿弥岩吉画「大震火災之図」　当館所蔵

❸ 吉村夫妻を救った蒸汽船

❷ 救助を求める吉村鉄之助と吉村ミネ

一、吉村鉄之助の震災体験

吉村鉄之助は一八五九（安政六）年八月に現在の滋賀県大津市で誕生、一五歳で京都の雑貨店に丁稚奉公へ出たのを皮切りに、薪炭商、鋳物商、唐木象牙商、三味線製造業、米屋などの職業を転々としていった（大月隆『成功百話』文学同志会、一九一〇年）。この間、三味線製造業を営んでいる時、同志社の新島襄等の影響でキリスト教の洗礼を受け、クリスチャンとなっている（泉田精一『我国の実業家と基督教』丁未出版社、一九二四年）。その後、友人の紹介で電信機械を扱う東京の田中製造所（後の芝浦製作所）に就職、そこで六年間修業を積んだ後に独立し、自らの工場を持つことになった。以後、事業は成功、吉村は琵琶湖西岸に敷設された江若鉄道など、複数の会社の重役を務めたほか、一九一七（大正六）年四月の第一三回衆議院総選挙に出馬して当選、一九二〇年五月の第一四総選挙でも再選を果たしている。自宅は東京市芝区白金台町で、吉村は実業界への影響力だけでなく、政治的な力を持った実力者でもあった（経歴は猪野三郎編『昭和三年版 大衆人事録』を参照）。

さて、「大震火災之図」を確認すると、「大正拾弐年九月一日鵠沼別荘より帰京に際し東海道程ケ谷駅発車数分の後時正に正午非常なる大震続いて火災に遭遇し横浜停車場を経て高島町海岸に避難し進退の谷（きわ）まれる際大悲観世音菩薩之加護により図らず小蒸汽船に会し両名生命を全うしたり」と、解説文が記されている。クリスチャンの吉村が丹阿弥岩吉に観音菩薩を描かせた理由は判然としないが、丹阿弥は火災を背にする吉村と妻のミネ（❷）、さらにそれを迎えに来る蒸汽船を描いている（❸）。内田宗治『関東大震災と鉄道』（新潮社、二〇一二年）によれば、吉村夫妻の乗っていたのは、真鶴午前九時四五分発東京行きの第一一二列車で、横浜駅の手前で被災していた。同地区を管轄する戸部警察署長の遠藤至道警視は、「第十二（ママ）列車は横浜駅を距る約三丁の地点で震災に遭遇したが脱線顛覆を免れて乗客にも死傷者を生じなかった。まず不幸中の幸ひといふべきである。乗客中には代議士の吉村鉄之助氏等も見えてゐた」と自著『補天石』（水月道場、一九二四年）に記している。

鉄道省の編纂・発行した『国有鉄道震災誌』（一九二七年）によれば、第一一二列車は乗客を降ろした後、午後二時頃、火災に襲われ、車両の一部を失った。❹のように、市内各所で発生した火災は強風に煽られて燃え広がり、市街地を焼け野原にしていった。激しい炎に追われるなか、高島町の海岸で小型の蒸汽船に救われたことを神仏に感謝し、吉村は自らの被災体験を丹阿弥に依頼して日本画に残したと推察できる。

二、師正王の追悼

関東大震災が発生した一九二三（大正一二）年九月一日の午前、吉村鉄之助はミネと共に鵠沼の自らの別荘を訪ねている。「大震火災之図」で注目したいのは、❷のように、二人の姿が正装である点である。当時、吉村の別荘には、戦後、内閣総理大臣を務める東久邇宮稔彦（なるひこ）王の家族が七月一九日から滞在しており、吉村夫妻はその接待にむかった。陸軍軍人の稔彦王はフランスに留学していたが、妃の聡子内親王は三人の息子とともに湘南の夏を楽しんでいた。吉村夫妻は東久邇宮家の接待の後、午前一一時二一分に藤沢駅から第一一二列車に乗ったと考えられる。その三七分後の午前一一時五八分、鵠沼を激震が襲い、吉村の別荘は倒潰する。ここで第二王子の師正（もろまさ）王（一九一七年一一月三日生まれ）が息を引き取ったほか、侍女など数人の犠牲者を出した。そうした鵠沼の被災状況については仙田四五郎編『震災誌』（藤沢小学校、一九二四年）や、『鵠沼』第五〇号（鵠沼を語る会、一九八九年）等に詳しく記されている。

震災三週年忌直前の一九二五年八月二八日、吉村は自らの別荘に「御遭難記念東久邇宮稔彦王第二王子師正王碑」（以下、「師正王碑」）を建立、また、同地の広岡助五郎が発起人となって犠牲者の祠堂を建てた（『横浜貿易新報』一九二五年八月一四日）。戦後、「師正王碑」は行方不明となったが、地元の人びとの努力で発見され、❺のように、現在は鵠沼の老人ホーム「オーシャンプロムナード湘南」の敷地内に残っている（石碑発見の経緯は一九八一年八月三一日付の『読売新聞』横浜版を参照）。石碑の正面には、師正王の生年月日から鵠沼の滞在時期、さらに震災によって亡くなるまでが刻まれているほか、裏面には、記念碑建設者である吉村と、滋賀県坂本の石工である松井源次郎の名前が確認できる。『横浜貿易新報』の記事には、「碑は琵琶湖畔の石材を以て」とあり、吉村は自らの郷里から石材と職人を呼び寄せて石碑を建立した。

以上のように、吉村は「師正王碑」と「大震火災之図」という二つの記録を残した。それぞれの制作時期を考えると、震災三週年忌に「師正王碑」を建立することで、幼い皇族の犠牲を悼むとともに、翌年春に「大震火災之図」を丹阿弥岩吉に描かせたことで、自らの震災体験に一区切りつけようとしたのではないだろうか。二つの非文字資料は吉村の震災体験を現在に伝えている。

（吉田　律人）

❹ 大火災に襲われた横浜市街地

❺ 松井源次郎作「師正王碑」　2023年1月撮影